東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

知的障害児者の形態的・統語的側面に視点を当てた言語研究の現状と課題：特異的言語発達障害児の知見との比較を中心に

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-04-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 村尾, 愛美
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166817

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　72: 287 – 297，2021.

知的障害児者の形態的・統語的側面に視点を当てた言語研究の現状と課題

―― 特異的言語発達障害児の知見との比較を中心に ――

村　尾　愛　美*

支援方法学分野

（2020年9月29日受理）

1．はじめに

言語発達遅滞が見られる障害の一つに，知的障害がある。知的障害を含め，言語発達遅滞を示す子どもの中には，一語発話段階や二語発話段階で停滞する者が存在することが知られている。このことを踏まえると，知的障害児者の言語を正しく理解し，支援する上で，知的障害児者の言語の文法的側面の特徴を明らかにしておくことが不可欠であると思われる。従来から，知的障害児者の言語特徴として，構音の問題，発話の不明瞭さや非流暢性などが見られることが知られており，音韻的側面からの検討は多くなされてきた（石田，1999；西村・綿巻・原，1997；大澤，1995；島守・伊藤，2011；高木・伊藤；2007a，2007b）。しかし，文法面つまり形態的・統語的側面に視点を当てた知的障害児者の言語研究は著しく少ない。Koizumi and Kojima（2019）は，統語的側面に視点を当て，国内外の知的障害児者の言語研究を概観し，日本語を対象として統語的側面に視点を当てた知的障害児者の言語研究が著しく少ないことと，その研究の必要性を述べている。

知的障害が見られ，言語障害に特徴があるとして知られているのが，ダウン症候群である。従来の知見から，ダウン症児者の言語発達は，精神発達，非言語性知能など，言語以外の領域の発達に比べて有意に遅れることが明らかになっており，特に，構音と文法面の困難さが顕著に見られることが知られている（斉藤，2007）。これに対して，知的障害が見られるものの，言語能力，特に，形態的・統語的側面の能力が保たれているとして注目されてきたのが，ウィリアムズ症候群である（永井，2007）。

一方，知的障害は認められないが，言語の形態的・統語的側面に顕著な困難さを示す言語障害に，特異的言語発達障害（specific language impairment: 以下SLI）がある。SLIとは，知的障害や聴覚障害，明らかな神経学的異常など言語発達を阻害する要因が認められないにもかかわらず，言語能力に著しい制約を示す障害である（Leonard, 2014）。なお，SLIという用語は，単一の障害を指すのではなく，さまざまな言語障害を指す包括的な用語である（福田，2014）。近年では，SLIを含め発達性言語障害（developmental language disorder: DLD）という用語が用いられる傾向にあり，用語の在り方について議論がなされているが（Bishop, Snowling, Thompson, Greenhalgh, & the CATALISE-2 consortium, 2017; Green, 2020），本稿では，SLI児と知的障害児者を比較した従来の研究を中心に概観するため，SLIという用語で統一する。

これまでの英語を中心とする欧米の知見から，SLI児には，時制や一致（agreement）の形態素の脱落などで現れる形態統語論的側面（morphosyntax）の困難さと非語の復唱の困難さが共通に見られる特徴として報告されており，これらの困難さの背景には，文法演算（grammatical computation）と音韻短期記憶（phonological short term memory）の弱さがある可能性が指摘されている（Leonard, 2014）。欧米では，このSLI児の言語特徴と，ダウン症児者やウィリアムズ症児者の言語特徴を比較する研究が行われている。その理由は，障害種間の比較を行うことによって，それぞれの言語特徴を明確にし，正しい理解と支援に繋げるという臨床的意義に他ならない。

＊　東京学芸大学 総合教育科学群 特別支援教育教室（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）

そこで本稿では，まず，形態的・統語的側面に視点を当てた知的障害児者の言語研究，特に，SLIの知見を踏まえたダウン症児者及びウィリアムズ症児者の研究を中心に概観する。次に，形態的・統語的側面に視点を当てた，最近の日本語のSLI研究を紹介する。最後に，SLI研究の知見を踏まえた，わが国の知的障害児者の言語研究における今後の課題について述べる。

２．知的障害児者の言語の形態的・統語的側面

２．１　欧米におけるダウン症児者の言語研究

知的障害児者を代表する１群として，ダウン症児者がとりあげられ，その発達などが論じられることが多いのは，ダウン症が1000人に１人と発症率が高いこと，原因が21番目の染色体の異常によることがはっきりしていることなどによる（斉藤，2002a）。これまでの従来の知見から，ダウン症児者の言語能力は非言語性の認知能力などに比して低く，言語の理解面に比して表出面のほうが困難であり，語彙面に比して，形態的・統語的側面が著しく障害を受けることなどが明らかになっている（Chapman, 1997）。特定の形態的・統語的側面として，文法形態素（Rutter & Buckley, 1994），時制，動詞の規則形や不規則形，主語と動詞の一致（Penke, 2018, 2019; Stathopoulou & Clahsen, 2010），束縛（再帰形と代名詞の分布を規定するもの）や受動文（Perovic, 2006）に視点を当てたものなどがある。また，最近では，Christodoulou and Wexler（2016）がギリシャ語キプロス方言を対象として，格標示（case-marking）に視点を当てた検討を行っている。以下では，ダウン症児の言語特徴とSLI児の言語特徴を比較した研究を中心に概観する。

Laws and Bishop（2003）は，非言語性の認知能力で統制したSLI児と青年期のダウン症児の言語特徴を比較した。その結果，表出，理解どちらにおいても，語彙に比して文法面が障害を受け，動詞の時制標示の困難さや非語の復唱の困難さを示すという点でSLI児とダウン症児は類似していた。しかし，いくつかの点で，相違も見られた。ダウン症児の語彙は，精神年齢（mental age: 以下MA）で揃えた定型発達児と差が見られなかったが，SLI児は差が見られた。また，ダウン症児は，規則形過去の成績が定型発達児に比して低かったが，不規則形過去では，差が見られなかった。一方，SLI児は規則形，不規則形ともに，定型発達児に比して低かった。

イタリア語を対象とした，Caselli, Monaco, Trasciani, and Vicari（2008）も，ダウン症児とSLI児との間で共通点と相違点が見られることを指摘しており，MAで統制したダウン症児とSLI児では，語彙面と形態的・統語的側面の理解面では差が見られないが，表出面については，ダウン症児の成績がSLI児に比して著しく低いことを報告している。

また，SLIの説明仮説の一つであるEOI仮説（extended optional infinitive account）から，詳細な検討を行っているものもある。EOI仮説とは，幼児期には，過去時制を示す-ed，三人称単数現在を示す-sなどの形態素の標示が随意的であるOI（optional infinitives）段階が存在するという仮説（Wexler, 1994）に基づき，SLI児はこのOI段階に長く留まっている（extended optional infinitive: EOI）とするものである（Rice, Wexler, & Cleave, 1995）。この仮説では，時制に関わる形態素の困難さは予測するが，そうではない名詞や形容詞の屈折に関する困難さは予測されない。以下では，この予測に基づく研究を紹介する。

Eadie, Fey, Douglas, and Parsons（2002）は，平均発話長（mean length of utterance: 以下MLU）で統制したダウン症児，SLI児，定型発達児を対象として，自然発話の分析及び文復唱課題などを行った。自然発話の分析では，従来のSLI研究の知見に基づき，1）時制の形態素の総合得点（拘束形態素と自由形態素の両方を含む），2）時制の屈折の総合得点（拘束形態素のみ），3）時制に関わらない形態素の総合得点，4）各形態素の分析を行っている。その結果，SLI児，ダウン症児ともに時制の屈折及び時制以外の形態素の正答率が定型発達児に比して有意に低く，SLI児とダウン症児の間では，どの形態素においても差が認められなかった。また，文復唱課題においても，SLI児とダウン症児は定型発達児に比して低い成績を示したが，SLI児とダウン症児の間には差は認められなかった。

また，Brown（2004）も，時制に関わる形態素と時制に関わらない形態素という分類を用いて，ダウン症児とMLUで統制した定型発達児の自然発話を分析した。その結果，時制に関する形態素の脱落の頻度は，両群で差が見られたが，時制に関わらない形態素では，差は認められなかった。

一方，Ring and Clahsen（2005a）は，過去時制，名詞の複数形，形容詞の比較級に視点を当てた実験的検討を行った。その結果，対象としたダウン症児は，時制に関わらない形態素においても，過去時制と同様に不定形の割合が高かった。この結果から，ダウン症児の言語特徴には，必ずしもEOI仮説が当てはまるわけではないこと，ダウン症児の言語障害がSLI児に比してより広範囲に見られる可能性が示唆されている。

Bol and Kuiken（1990），Bol and Kasparian（2009） は聴覚障害児も含めた検討を行っている。Bol and Kuiken (1990) では，オランダ語版のLanguage Assessment Remediation Screening Procedure（LARSP）を用いて，ダウン症児，SLI児，聴覚障害児の形態的・統語論的特徴が比較されている。このLARSPは対象児の自然発話データをプロファイルチャート（profile chart）にプロットすることによって，言語発達段階とその特徴を明らかにし，指導・支援の手掛かりを得るものである。Bol and Kuiken（1990）の検討では，ダウン症児，SLI児，聴覚障害児は，主語－述語構造（subject-predicate structures）を欠く発話が多く，代名詞の使用が少なく，動詞の一致が少ないという共通点を示していた。ダウン症児は，SLI児，聴覚障害児に比して，より上記の特徴を示していたことから，3群に見られる言語障害は程度の問題である可能性が示唆されている。

Bol and Kasparian（2009）は，自然発話中に見られた代名詞（指示代名詞，人称代名詞（主語，目的語），疑問代名詞，所有代名詞）に視点を当てて，ダウン症児，SLI児，聴覚障害児，MLUで統制した定型発達児を比較している。その結果，ダウン症児の指示代名詞を除き，代名詞の産出の数では，群間に有意差は見られなかった。また，獲得の順序についても，4群は類似していた。なお，代名詞の誤用が最も多く見られたのはSLI児であり，誤用の多くが格標示（case-marking）の誤用であった。

このように，SLIの知見を踏まえた，ダウン症児者の言語研究から，ダウン症児者の形態的・統語的側面の特徴がより詳細になりつつある。ダウン症児とSLI児との間に共通点と相違点が見られているが，MLUなどの言語発達段階で統制した場合，共通点が見られる傾向にあるようである。

２．２　わが国におけるダウン症児者の言語研究

日本語を対象として，知的障害群とSLI児を比較した検討はあるものの（田中，2003），ダウン症児者とSLI児を明確に比較した研究は筆者の知る限りない。そこで，以下では，日本語のダウン症児者の形態的・統語的側面を検討したものを紹介する。利倉・黒田（1989）は，ダウン症児１名の助詞の習得過程を日記の分析から検討し，その結果を踏まえた実験的検討を行った。その結果，日記の分析で対象となったダウン症児１名では，格を表す助詞（例「が」「を」）の使用頻度が，接続を表す助詞（例「けど」「ので」）や限定を表す助詞（例「は」「も」）の頻度に比して高いこと，可逆文における「に」の使用頻度が非可逆文よりも低いものの，可逆文において「に」が用いられるのは主格が省略された文に限られていることなどが明らかになった。さらに，利倉・黒田（1989）は，ダウン症児を含む知的障害児20名を対象として，場所や手段などを示す「で」，時や場所などを示す「に」，対象などを示す「に」，理由・原因を示す「ので」，逆接「のに」を挿入させる文完成課題を実施した。その結果，ダウン症児の助詞通過率が他の知的障害児に比して低いことが示された。

また，綿巻（1999）は，6歳のダウン症児の発話サンプルを用いて，助詞及び助動詞の発達順序を縦断的に検討した。その結果，ダウン症児の助詞及び助動詞の発達は，大久保（1967）で報告されている定型発達児１名の獲得順序と類似していることが明らかになっている。

斉藤（2003）は，利倉・黒田（1989）や綿巻（1999）の知見を踏まえ，ダウン症児者を対象として，6種の格助詞（主格「が」，対格「を」，場所格「で」，付着格「に」，起点格「から」，道具・手段格「で」）と2種の態（受動態，使役態）の表出を評価する独自の検査と状況絵の説明場面での発話の分析を行った。構文検査，状況絵の説明の結果を従来の定型発達児の知見（斉藤，2002b，c）と比較すると，ダウン症児者は同等のMAの定型発達児に比べ，格助詞，態ともに習得が遅れることが示された。格助詞の誤用の67%が「わからない」や目標とする格を含まない表出であったが，格助詞の省略や置換も見られた。態の表出では，どちらの態も対象児の半数以上が未習得であり，誤用の多くが能動態への誤りであったことが明らかになった。一方，状況絵の説明の分析からは，MA6歳前半以前では文の長さが，MA5歳後半以降では文法形態素出現比率が定型発達児と同等であることが明らかになっている。

Koizumi, Saito, and Kojima（2019）は，知的障害児の統語発達を検討している。統語発達の指標として，理解面はJ.COSS日本語理解テスト（中川・小山・須賀，2010）を，表出面は斉藤（2002b，2003）の検査を踏まえた課題を用いている。また，知的障害児は，ダウン症，自閉スペクトラム症，その他の知的障害に分かれており，タイプ別の比較もなされている。J.COSSの得点は，どのMA段階においても，知的障害児の方が定型発達児に比して低く，同じMA段階であれば，タイプ間での成績の差は認められなかった。一方，格助詞の表出については，ダウン症児が，自閉スペクトラム症児，その他の知的障害児に比して少なく，後の2群間では差は見られなかった。また，態の

表出については，受動態は自閉スペクトラム症児のみ，使役態は，ダウン症児のみ定型発達児との間で差が見られた。さらに，Koizumi, Maeda, Saito, and Kojima（2020）では，ダウン症児を含む，知的障害児の統語発達と言語性記憶との関係を明らかにするために，Koizumi et al.（2019）で用いた統語発達の検査に加え，聴覚言語性記憶の検査であるRey's Auditory Verbal Leaning Test（AVLT）と数唱課題が行われた。その結果，ダウン症児の成績は統語の理解面，表出面ともに，同MAの定型発達児に比して低く，数唱の順唱，AVLTの即時及び遅延再生の成績が定型発達児に比して有意に低いことが示されている。

このように，わが国では，形態的・統語的側面に視点を当てたダウン症児者の言語研究は著しく少ないものの，日本語を母語とするダウン症児者では，格助詞や態に困難さが表れる可能性が示唆されている。

２．３　欧米におけるウィリアムズ症児者の言語研究

次に，ウィリアムズ症児者を対象とした知見を概観する。ダウン症と同様，ウィリアムズ症候群の原因も染色体の異常による（7番目の染色体に欠失をもつ）ことが示されている。従来から，ウィリアムズ症児者は，知的障害が認められるが，言語の形態的・統語的側面が比較的保たれている症例として報告され，この乖離が，言語能力のモジュール性を支持するとみなされてきた。Bellugi, Marks, Bihrle, and Sabo（1988）の報告はこの特徴をよく示しており，頻回に引用されている。

Bellugi et al.（1988）はウィリアムズ症児３名（FSIQ49～54）の文法面の特徴を様々な方法を用いて検討している。まず，ストーリーテリング課題（storytelling task）における３名のMLUが8.6～13.1と高い値を示すこと，従来の知見に示されているダウン症児のMLUの値（3.0～3.5）に比して高い値であることを指摘している。さらに，３名の発話には，時制やアスペクトを示す標識，受動文，条件節などの正しい使用が認められており，複雑な文法構造の表出が見られることを報告している。また，実験的検討として，文法理解課題であるTROG（Test for Reception of Grammar）（Bishop, 1983）を実施した結果，３名の正答率は80%前後と高かった。また，アスペクトに関する文完成課題においても，78～92%と高い正答率を示していた。さらに，文法性判断課題においては，非文法的な文を正しく判断するのみならず，正しく修正することも報告されている。このような，ウィリアムズ症児の特徴は，知的障害が認められないものの，形態的・統語的側面に著しい困難さを示すSLI児の特徴と対照的な特徴を示していると捉えられてきた。

Clahsen and Almazan（1998）は，英語を母語とするウィリアムズ症児４名を対象として，ストーリーテリング課題の発話の分析と実験課題を行い，対象児の統語的側面と形態的側面の特徴を検討した。実験課題は，従来のSLI児の知見を引用し，受動文と束縛表現に視点を当てた２種類の理解課題，過去時制の屈折に視点を当てた２種類の産出課題を行い，ウィリアムズ症児のMAに生活年齢（chronological age: 以下CA）を揃えた定型発達児，SLI児のデータと比較した。その結果，対象としたウィリアムズ症児の発話は，文脈的にも文法的にも正しい傾向にあった。また，発話の15%は関係節などを含む埋め込み文であった。実験課題では，受動文，束縛表現の理解課題の成績は天井効果を示すほどであった。一方，過去時制の屈折については，規則形の過去に比して不規則形の過去の成績が低いことが示され，この傾向は，SLI児，定型発達児と異なっていた。これらの結果から，Clahsen and Almazan（1998）は，ウィリアムズ症児では，語彙項目の情報へのアクセスには問題が見られるものの，演算システムについては保たれていると報告している。

さらに，Clahsen and Almazan（2001）は，名詞の複数形，複合語内の複数形に視点を当てて，ウィリアムズ症児の語彙と文法知識を検討した。その結果，ウィリアムズ症児は規則形の複数形は常に正しく産出できていたが，不規則形の複数形の成績は低い傾向にあった。また，複数形の-sを複合語内の非主要部の要素（non-head elements）として過剰に使用することが明らかになった。このことから，Clahsen and Almazan（2001）は，Clahsen and Almazan（1998）と同様，ウィリアムズ症児に見られる語彙面と文法面の乖離は，言語の語彙と演算部門との間の理論的な相違を支持すると述べている。同じく，規則形と不規則形に視点を当ててドイツ語のウィリアムズ症児を対象とした検討においても，同様の報告がなされている（Krause and Penke, 2002）。

また，Clahsen and Temple（2003）では，形容詞の比較級に視点を当てて，ウィリアムズ症児とSLI児のデータ（Dalalakis, 1994）を比較している。その結果，ウィリアムズ症児は比較の接辞-erを付加すべきタイプでは，定型発達児と同レベルの好成績であった。しかし，moreを付加するタイプと不規則形では成績が著しく低く，誤用のほとんどが，-erの過剰使用であった。この特徴は，比較の標示の脱落の誤用が多いSLI児の特徴と異なっていた。Clahsen and Temple（2003）

は，これらの結果が，過去時制や名詞の複数形に視点を当てたClahsen and Almazan（1998，2001）の結果と一致すると述べている。

一方，Karmiloff-Smithらは，ウィリアムズ症児者が統語的側面に困難さを示すことを従来から指摘してきた（Karmiloff-Smith, Grant, Berthoud, Davies, Howlin, & Udwin, 1997; Karmiloff-Smith, Tyler, Voice, Sims, Udwin, Howlin, & Davies. 1998; Thomas, Grant, Barham, Gsödl, Laing, Lakusta, Tyler, Grice, Paterson, & Karmiloff-Smith, 2001）。Karmiloff-Smith et al.（1998）は，ウィリアムズ症児者を対象として，能動文，受動文に視点を当てた課題（絵画選択法）を実施した。その結果，ウィリアムズ症児者の平均正答率は76%であり，天井効果を示した統制群に比して低かった。また，誤用のほとんどが統語的なものであったことから，ウィリアムズ症児者は統語的側面に障害を受けていることを指摘した。

また，Thomas et al.（2001）は，Clahsen and Almazan（1998）の知見を踏まえ，規則形と不規則形の過去に視点を当てた検討を行っている。その結果，対象としたウィリアムズ症児者は，同言語性MAの統制群と比較して，不規則形の過去に困難さを示さなかった。また，非語に対する般化（-edの付加）の割合が低かった。これらの結果にてついて，Thomas et al.（2001）は，Clahsen and Almazan（1998）らの結果と異なると報告している。

Stojanovik, Perkins, and Howard（2004）はCAで統制したウィリアムズ症児とSLI児を対象として，標準化された言語性及び非言語性の検査とナラティブの課題を実施した。言語性の課題は，語彙と文法面の理解及び表出を測る検査で構成されていた。その結果，標準化された言語検査では，両群に差が認められなかった。ただし，TROGで測られた，主語，目的語の関係節，埋め込み文では，両者は類似していたが，ウィリアムズ症児は５名中２名しか受動文の項目を通過しなかったのに対し，SLI児は５名中４名が通過しており，違いも見られている。また，ナラティブの課題では，ウィリアムズ症児とSLI児は文法形態素の正答数には差が認められなかったものの，ウィリアムズ症児はSLI児に比して，置換の誤用が多い傾向にあった。これらの結果から，Stojanovik et al.（2004）はウィリアムズ症児の言語特徴が，従来から指摘されてきた文法能力のモジュール性を支持しない可能性と，ウィリアムズ症児の言語特徴の個人差が大きい可能性を指摘している。

また，Perovic and Wexler（2010）は，従来の知見（Clahsen & Almazan, 1998など）では，受動文の種類が十分ではないことを指摘し，動詞の違い（例“hold”と“love”）に視点を当てた刺激文を用いて，ウィリアムズ症児の受動文の困難さを検討している。その結果，ウィリアムズ症児では，psychological verbs（例“love”）を用いた受動文で低い成績を示すことが明らかになっている。

次に，ダウン症とウィリアムズ症候群を比較した研究を報告する。Vicari, Caselli, Gagliardi, Tonucci, and Volterra（2002）は，MAで統制したイタリア語のダウン症児とウィリアムズ症児，定型発達児を対象として，質問紙による語彙の評価，言語理解検査，文復唱課題，MLUの分析を行った。その結果，ダウン症児においては，語彙と認知能力との間に差は見られなかったが，形態的・統語的側面に困難さが認められた。ウィリアムズ症児は，ダウン症児ほどの困難さは示さなかったが，内容語を用いた句の復唱課題に困難さを示した。

Ring and Clahsen（2005b）は，青年期のウィリアムズ症児，ダウン症児，両者のMAに揃えた定型発達児を対象として，束縛表現と能動及び受動文に視点を当てた実験課題を実施している。その結果，ダウン症児は，受動文と統語的束縛に困難さを示すのに対し，ウィリアムズ症児は受動文と束縛（非再帰形も含む）に困難さを示さなかった。この結果について，従来のSLI児の知見と比較し，ダウン症児の困難さの背景にある問題はSLI児のものと異なると述べている。

Joffe and Varlokosta（2007）は，受動文とwh疑問文に視点を当てた検討を，CA，MA，IQで統制したダウン症児，ウィリアムズ症児，MAを合わせた年少の定型発達児を対象として行った。その結果，ダウン症児，ウィリアムズ症児は標準化された検査のみならず，実験課題における受動文の理解，wh疑問文の理解と産出においても，類似した成績を示した。また，ダウン症児，ウィリアムズ症児ともに，年少の定型発達児に比して成績が不良であり，統語的側面に著しい困難さがあることが示された。

一方，Levy and Eilam（2013）は，ヘブライ語を母語とするダウン症の幼児，ウィリアムズ症候群の幼児と定型発達児の自然発話データを比較し，ダウン症児とウィリアムズ症児は，時制標示された動詞，一致などさまざまな点で類似していることを明らかにした。この結果は，ダウン症児とウィリアムズ症児では，早期の言語発達の様相は類似していることを示している。

このように，SLIの知見を踏まえた検討やダウン症児との比較を行った検討から，ウィリアムズ症児者の

言語特徴が明らかになりつつある。ウィリアムズ症児者において，他の認知能力に比して，形態的・統語的側面が保たれているかどうかについては，一致した見解が得られていない。この理由の一つとして，幼児，学齢期，青年期などの発達段階によって異なる可能性が考えられる。

２．４　わが国におけるウィリアムズ症児者の言語研究

欧米においては，形態的・統語的側面に視点を当てたウィリアムズ症児者の言語研究はダウン症児者の言語研究に比して少ない。この傾向は，わが国おいても同様である。日本語を対象としたウィリアムズ症児者の言語研究は，語彙面や語用論的側面からの検討はあるものの（Asada，Tomiwa, Okada, & Itakura, 2010a, b；中村，2016），形態的・統語的側面に視点を当てた検討は，僅かにしかない（小泉・小島，2019；正高，2002）。

正高（2002）では，文章理解の困難さが統語構造の複雑さとどのように関係するのかが報告されており，ウィリアムズ症児の文理解の困難さは統語構造の複雑さに起因しないと述べられている。また，小泉・小島（2019）はウィリアムズ症児２名の統語発達を検討している。統語発達の指標として，理解面はJ.COSS日本語理解テスト（中川ら，2010）を，表出面は独自の検査を用いている。ウィリアムズ症児の理解面の成績を，従来の知見に示されている他の障害種群と比較すると，成績の低い文法項目（例：接続詞，受動文，比較表現など）や成績の高い文法項目（例：二要素結合文，否定文など）が類似していた。また，ウィリアムズ症児者は多要素結合文など長い文において高い正答率を示していた。表出面においては，格助詞の習得数が他の障害種に比して多い傾向にあったものの，態の習得数は０個であるなどの特徴が報告されている。

小泉・小島（2019）の知見から，日本語のウィリアムズ症児の形態的・統語的側面の困難さは態に見られる可能性がある。なお，ダウン症と同様，日本語を対象として，SLI児とウィリアムズ症児者の言語特徴を比較した研究は筆者の知る限りない。

３．最近の日本語を母語とするSLI児の言語研究

SLIは，知的障害や聴覚障害など言語発達を阻害する明らかな要因が認められないにもかかわらず，言語能力に著しい制約を示す障害である（Leonard, 2014）。このことを踏まえると，SLIの研究成果は，言語発達遅滞を理解し，支援する上で，最も基盤となる知見を提供するものであると考えられる。本稿２節から，SLI児の知見を踏まえた知的障害児者の言語研究は，理解と支援のための重要な手掛かりを提供していると思われる。そこで以下では，形態的・統語的側面に視点を当て，近年の日本語を母語とするSLI児の研究を概観する。

３．１　自然発話データを用いた検討

村尾・伊藤（2013）は典型的なSLI児２名を対象として，自然発話に見られる誤用の全体的な特徴を，益岡・田窪（1992）などの言語学の知見を用いて分析した。その結果，２名ともに形態的・統語的誤用の割合が最も高く，形態的・統語的誤用の中では，格助詞の誤用の割合が他の誤用に比して高い傾向にあった。この結果から，日本語のSLI児も英語のSLI児と同様，形態的・統語的側面に困難さを示すことが示されている。

さらに，村尾・松本（島守）・伊藤（2012）は，SLI児の自然発話に見られた格助詞の誤用を，生成文法理論の枠組みの一つである，構造格と内在格に視点を当てて分析した。その結果，構造格の格助詞（村尾ら（2012）では格助詞「が」「を」「に」）の誤用が内在格の格助詞の誤用に比して有意に多いことが明らかになっている。また，SLI児の「が」「を」「に」の誤用率は幼児に比して高い傾向にあることが示されている。村尾・伊藤（2014）は，典型的なSLI児２名の約10年にわたる自然発話データを用いて，格助詞の誤用の持続性を検討している。その結果，SLI児２名ともに格助詞の誤用は減少するものの，縦断研究終了時においても依然として，定型発達児の誤用率との間に差が存在することが示された。

一方，Murao and Ito（2015）は，英語のSLI児の臨床的指標となりうるとして注目されてきた時制標示（tense-marking）に視点を当てた検討を行った。その結果，日本語のSLI児には時制標示（「る」や「た」）の脱落は認められず，誤用率は従来の英語のSLI児のデータよりも著しく低かった。また，僅かではあったが，観察された誤用のすべてが置換であった。Murao and Ito（2015）では，日本語と英語のSLI児の言語特徴の違いについて，言語の一致現象の有無に注目し，SLIの説明仮説の一つであるEUCC仮説（extended unique checking constraint account）（Wexler, 2003）と失文法を対象とした神尾（1986）の仮説から説明を試みている。

このように，自然発話を用いた検討から，定型発達児に比して誤用が多く，その持続性が示されている格助詞の誤用は，日本語を母語とするSLI児の言語特徴

の一つである可能性が示唆される。

３．２　実験課題を用いた検討

Murao, Ito, Fukuda, and Fukuda（2017）は，格助詞「が」「を」「に」の困難さを態と語順との関係から検討している。学齢期のSLI児と定型発達児を対象として，格助詞挿入課題を実施したところ，SLI児の平均正答率は定型発達児に比して著しく低く，特に非基本語順文の成績が低いことが示されている。さらに，村尾・伊藤（印刷中）は，SLI児において，主格，対格，与格付与の困難さは同様ではなく，主格付与については対格や与格よりも獲得されている可能性を示唆している。なお，村尾・伊藤（2017）は，SLI児の自然発話の格助詞の誤用率と実験課題における格助詞「が」「を」「に」の誤用率を比較しており，自然発話の格助詞の誤用率は実験課題の誤用率に比して著しく低いことを指摘している。この自然発話と実験課題の乖離は，日本語のSLI児のアスペクトについて検討したIto, Fukuda, and Fukuda（2011）においても報告されている。

また，橋本・岩田・下條・柳生・室橋（2016）は，SLIを併せ持つ発達性ディスレクシア１名を対象として，格助詞，態，文理解に視点を当てた構文検査を行っている。その結果，対象児に格助詞「が」「を」「に」の使用の著しい困難さが見られることが報告されている。

このように，格助詞「が」「を」「に」の困難さは，日本語を母語とするSLI児の臨床的指標となりうる可能性が示唆されている。また, 格助詞「が」「を」「に」を手掛かりとして言語発達遅滞を同定する場合は，実験課題を用いた検討の必要も示されている。

４．わが国における知的障害児者の言語研究の課題

２節において，SLI研究の知見を踏まえたダウン症児者及びウィリアムズ症児者の研究を中心に概観し，SLIの知見を踏まえることによって，知的障害児者の言語特徴がより明確になることを示した。また，欧米の研究に比して，わが国では，形態的・統語的側面に視点を当てた，ダウン症児者，ウィリアムズ症児者の言語研究は著しく少ないことを述べた。

３節では，最近の日本語のSLI研究を報告し，格助詞「が」「を」「に」の困難さが日本語のSLI児の臨床的指標になりうる可能性と格助詞を手掛かりとする場合は，実験的検討も必要であることを述べた。以下では，２節，３節を踏まえ，知的障害児者の形態的・統語的側面に視点を当てた言語研究の今後の課題を述べたい。

４．１　SLIを含む他の発達障害の言語特徴との比較

従来の欧米の知見から，知的障害児者の言語特徴の解明を目指す上で，SLI児の知見を踏まえた検討が有効であることがうかがえる。しかし，２節で述べたように，日本語を対象として，ダウン症児者，ウィリアムズ症児者，SLI児の言語特徴を比較したものは筆者の知る限りない。ダウン症児者は，格助詞の使用の困難さを持つという点でSLI児と類似している可能性があるが，同じメカニズムでその困難さが生じているのかどうかは不明である。この点を明らかにすることは，指導・支援のために必要不可欠である。これらのことから，SLI児を含む他の発達障害児と知的障害児との言語特徴の比較が必要であると考える。

なお，伊藤（1998）は従来の知的障害児者の言語研究から，典型的な知的障害児の初期の言語獲得は定型発達児に比して遅れるということを除けば，言語獲得段階，統語的複雑さの順序において類似していると述べている。また，本稿においても，その可能性が考えられた。これらの知見から，知的障害児者の言語を他の発達障害児，定型発達児と比較する場合は，言語発達段階を考慮する必要があると思われる。

４．２　言語学の知見を踏まえた格助詞と態の検討

日本語を対象としたダウン症児者及びウィリアムズ症児者の検討から，日本語を母語とする知的障害児者の言語特徴として格助詞，態（または受動文）の困難さがうかがえた。言語理論の一つに，生成文法理論がある。生成文法理論は統語論を中心としており，知的障害児者の形態的・統語的側面の特徴を明らかにする上で，有効な理論と思われる。そこで，以下では，生成文法理論の知見を踏まえた格助詞と態の検討について述べる。

生成文法理論では，構造格と内在格という二分法が，格を扱う際の基本的な枠組みの一つである。三原（1994）によれば，構造格の格助詞が「が」「を」，内在格の格助詞が「が」「を」以外に分類される。構造格と内在格は，構造格の格助詞が固有の意味を持たないのに対し，内在格の格助詞が「大阪から（起点）」「大阪に（着点）」「大阪で（場所）」のように固有の意味を有している点で異なる。さらに，主格は時制辞によって付与されるのに対し，対格は隣接する他動詞によって付与されるなど，構造格の中でも格付与のメカニズムが異なる（三原，1994）。また，長谷川（1999）

は，格は名詞句に述語との文法関係を持たせることで，それを述語の項と認定させる機能を持つとし，寺村（1982）では，態は「格の移動と動詞の形態の相関」（p.209）として捉えられている。これらの知見からわかるように，格助詞は述語，特に動詞とは切り離せない関係にある。

斉藤（2003），Koizumi et al.（2019）の知見から，ダウン症児者を含む知的障害児者では，「が」「を」「に」のみならず，「で」や「から」にも困難さが見られる可能性が考えられる。このような困難さについて，村尾ら（2012）のSLI児の検討のように，構造格と内在格という枠組みを用いると，統語構造に依存するか否か，意味の有無という視点からのアプローチが可能である。また，態の困難さについては，態のみならず，格助詞との関係を考慮する必要がある。このように，言語学の知見を踏まえることによって，格助詞や態の困難さを掘り下げて検討できる可能性がある。

４．３　自然発話の分析と実験的検討の併用

知的障害児者を対象として，言語特徴を検討する場合は，注意や記憶などによる妨げを減らすという点で，自然発話の分析が有効であると言われている（Levy & Eilam, 2013）。一方，自然発話の収集には特定の構造や項目の産出が促せないなどの制限がある。特に，日本語では，格助詞「が」「を」の省略（三原，1994），さらには，文脈に応じて項の省略も許される（長谷川，1999）。これらのことから，自然発話の分析のみからでは，形態的・統語的側面の困難さの背景が十分に検討できない可能性がある。３節で示したように，村尾・伊藤（2017）では，SLI児の自然発話における格助詞の誤用率は実験課題に比して著しく低いことが示されている。

以上のことを踏まえると，日本語を対象として，知的障害児者の形態的・統語的側面を検討する場合は，実験課題を用いた検討も必要だと思われる。ただし，検査場面や刺激文などの手続きを考慮する必要があることは言うまでもない。

文　献

Asada, K., Tomiwa, K., Okada, M., & Itakura, S. (2010a) Atypical verbal communication pattern according to others' attention in children with Williams syndrome. *Research in Developmental Disabilities,* 31, 452-457.

Asada, K., Tomiwa, K., Okada, M., & Itakura, S. (2010b) Fluent language with impaired pragmatics in children with Williams syndrome. *Journal of Neurolinguistics,* 23, 540-552.

Bellugi, U., Marks, S., Bihrle, A., & Sabo, H. (1988) Dissociation between language and cognitive functions in Williams syndrome. In D. Bishop, & K. Mogford (Eds.), *Language development in exceptional circumstances*. Churchill Livingstone, Edinburgh, 177-189.

Bishop, D. V. M. (1983) *The Test for Reception of Grammar (TROG)*. Available from author at Department of Psychology, University of Manchester.

Bishop, D. V. M., Snowling, M. J., Thompson, P. A., Greenhalgh, T., and the CATALISE-2 consortium (2017) Phase 2 of CATALISE: a multinational and multidisciplinary Delphi consensus study of problems with language development: Terminology. *Journal of Child Psychology and Psychiatry,* 58, 1068-1080.

Bol, G. W. & Kasparian, K. (2009) The production of pronouns in Dutch children with developmental language disorders: A comparison between children with SLI, hearing impairment, and Down's syndrome. *Clinical Linguistics and Phonetics,* 23, 631-646.

Bol, G. W. & Kuiken, F. (1990) Grammatical analysis of developmental language disorders: A study of the morphosyntax of children with specific language disorders, children with hearing impairment and children with Down's syndrome. *Clinical Linguistics and Phonetics,* 4, 77-86.

Brown, M. (2004) Optional infinitives in Down syndrome. Massachusetts Institute of Technology, http://www.riverbendds.org/index.htm?page=brown.html. (Retrieved September 8, 2020).

Caselli, M. C., Monaco, L., Trasciani, M., & Vicari, S. (2008) Language in Italian children with Down syndrome and with specific language impairment. *Neuropsychology,* 22, 27-35.

Chapman, R. S. (1997) Language development in children and adolescents with Down syndrome. *Mental Retardation and Developmental Disabilities*, 3, 307-312.

Christodoulou, C., & Wexler, K. (2016) The morphosyntactic development of case in Down syndrome. *Lingua*, 184, 25-52.

Clahsen, H. & Almazan, M. (1998) Syntax and morphology in Williams syndrome. *Cognition*, 68, 167-198.

Clahsen, H. & Almazan, M. (2001) Compounding and inflection in language impairment: Evidence from Williams syndrome (and SLI). *Lingua*, 111, 729-757.

Clahsen, H., & Temple, C. (2003) Words and rules in children with Williams syndrome. In Y. Levy & J. Schaeffer (Eds.), *Language competence across populations: Toward a definition of specific language impairment*. Lawrence Erlbaum, Mahwah, NJ, 323-

352.

Dalalakis, J. (1994) English adjectival comparatives and familial language impairment. *McGill Working Papers in Linguistics*, 10, 50-66.

Eadie, P. A., Fey, M. E., Douglas, J. M., & Parsons, C. L. (2002) Profiles of grammatical morphology and sentence imitation in children with specific language impairment and Down syndrome. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 45, 720-732.

福田真二（2014）特異的言語障害研究の現状と課題．特殊教育学研究，52，317–332.

Green, L. (2020) The specific language impairment/ developmental language disorders forum: Fostering a discussion of terminology. *Perspectives of the ASHA Special Interest Groups*, 5, 3-5.

長谷川信子（1999）生成日本語学入門．大修館書店．

橋本竜作・岩田みちる・下條暁司・柳生一自・室橋春光（2016）特異的言語障害を伴う発達性ディスレクシアの１例．高次脳機能研究，36，432–439.

石田宏代（1999）ダウン症児の発語の明瞭さと音韻意識との関連．特殊教育学研究，36，17–23.

伊藤友彦（1998）知的障害児の言語―知識・獲得―．堅田明義・梅谷忠勇（編），知的障害児の発達と認知・行動．田研出版，37–50.

Ito, T., Fukuda, S., & Fukuda, S. E. (2011) Aspect in Japanese children with SLI. *Asia Pacific Journal of Speech, Language, and Hearing*, 14, 23-29.

Joffe, V. & Varlokosta, S. (2007) Patterns of syntactic development in children with Williams syndrome and Down's syndrome: Evidence from passives and wh-questions, *Clinical Linguistics & Phonetics*, 21, 705-727.

神尾昭雄（1986）失語症における言語学的側面―失文法の言語分析．失語症研究，6，1131–1136.

Karmiloff-Smith, A., Grant, J., Berthoud, I., Davies, M., Howlin, P., & Udwin, O. (1997). Language and Williams Syndrome: How intact is "Intact"? *Child Development*, 68, 246-262.

Karmiloff-Smith, A., Tyler, L. K., Voice, K., Sims, K., Udwin, O., Howlin, P., & Davies, M. (1998) Linguistic dissociations in Williams syndrome: Evaluating receptive syntax in on-line and off-line tasks. *Neuropsychologia*, 36, 343-351.

小泉愛美・小島道生（2019）ウィリアムズ症候群における統語発達―事例的研究を通して―．日本特殊教育学会第 57 回大会，ポスター発表.

Koizumi, M. & Kojima, M. (2019) Review of studies on syntactic development in children and adults with intellectual and developmental disorders: Comparing Japanese and international studies. *Asian Journal of Human Services*, 16, 119-135.

Koizumi, M., Maeda, M., Saito, Y., & Kojima, M. (2020) Correlations between syntactic development and verbal memory in the spoken language of children with autism spectrum disorders and Down syndrome: Comparison with typically developing children. *Psychology*, 11, 1091-1107.

Koizumi, M., Saito, Y., & Kojima, M. (2019) Syntactic development in children with intellectual disabilities: Using structured assessment of syntax. *Journal of Intellectual Disability Research*, 63, 1428-1440.

Krause, M & Penke, M. (2002) Inflectional morphology in German Williams Syndrome, *Brain and Cognition*, 48, 410-413.

Laws, G. & Bishop, D. V. M. (2003) A comparison of language abilities in adolescents with Down syndrome and children with specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 46, 1324-1339.

Leonard, L. B. (2014) *Children with specific language impairment*. (2nd ed.). The MIT Press, Cambridge, MA.

Levy, Y., & Eilam, A. (2013) Pathways to language: A naturalistic study of children with Williams syndrome and children with Down syndrome. *Journal of Child Language*, 40, 106-138.

正高信男（2002）ウィリアムズ症候群に特徴的な認知と言語．言語，31，30–37.

益岡隆志・田窪行則（1992）基礎日本語文法―改訂版―．くろしお出版.

三原健一（1994）日本語の統語構造―生成文法理論とその応用．松柏社．

村尾愛美・伊藤友彦（2013）特異的言語発達障害児２例の自然発話における誤用の特徴．音声言語医学，54，251–255.

村尾愛美・伊藤友彦（2014）特異的言語発達障害児２例における格助詞の誤用の持続性―約10年にわたる縦断データを用いて―．特殊教育学研究，52，163–168.

Murao, A. & Ito, T. (2015) Tense-marking errors in spontaneous speech of Japanese children with specific language impairment. *Journal of Special Education Research*, 4, 9-15.

村尾愛美・伊藤友彦（2017）日本語を母語とする特異的言語発達障害児における格助詞の誤用―自然発話と実験課題の誤用率の比較―．音声言語医学，58，177–184.

村尾愛美・伊藤友彦（印刷中）特異的言語発達障害児の文完成課題における格助詞の使用の特徴．音声言語医学.

Murao, A., Ito, T., Fukuda, S. E., & Fukuda, S. (2017) Grammatical case-marking in Japanese children with SLI. *Clinical Linguistics & Phonetics*, 31, 711-723.

村尾愛美・松本（島守）幸代・伊藤友彦（2012）特異的言語発達障害児２例における格助詞の誤用の特徴―構造格と内在格の視点から―．音声言語医学，53，194–198.

永井知代子（2007）Williams症候群の発達認知神経心理学．笹沼澄子（編）発達期言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論.医学書院，181-200.

中川佳子・小山高正・須賀哲夫（2010）J.COSS日本語理解テスト．風間書房．

中村みほ（2016）ウィリアムズ症候群のコミュニケーションの異質性．認知神経科学，18，128-134.

西村辨作・綿巻　徹・原　幸一（1997）1ダウン症児にみられた構音障害の継時的分析．特殊教育学研究，35，21-31.

大久保愛（1967）幼児言語の発達．東京堂出版．

大澤富美子（1995）ダウン症児の構音―音韻プロセス分析による検討―．音声言語医学，36，274-285.

Penke, M. (2018) Verbal agreement inflection in German children with Down syndrome. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 61, 2217-2234.

Penke, M. (2019) Regular and irregular inflection in Down syndrome: New evidence from German, *Cortex*, 116, 192-208.

Perovic, A. (2006) Syntactic deficit in Down syndrome: More evidence for the modular organisation of language. *Lingua* 116, 1616-1630.

Perovic, A., & Wexler, K. (2010) Development of verbal passive in Williams syndrome. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 53, 1294-1306.

Rice, M. L., Wexler, K., & Cleave, P. L. (1995) Specific language impairment as a period of extended optional infinitive. *Journal of Speech and Hearing Research*, 38, 850-863.

利倉　章・黒田吉孝（1989）知的発達遅滞児の助詞習得に関する研究―ダウン症M児の事例研究を中心に―．滋賀大学教育学部紀要人文科学・社会科学・教育科学，39，59-74.

Ring, M. & Clahsen, H. (2005a) Morphosyntax in Down's syndrome: Is the extended optional infinitive hypothesis an option? *Stem-, Spraak- en Taalpathologie*, 13, 3-13.

Ring, M., & Clahsen, H. (2005b) Distinct patterns of language impairment in Down's syndrome and Williams syndrome: The case of syntactic chains. *Journal of Neurolinguistics*, 18, 479-501.

Rutter, T. & Buckley, S. (1994) The acquisition of grammatical morphemes in children with Down's syndrome. *Down Syndrome Research and Practice*, 2, 76-82.

斉藤佐和子（2002a）ダウン症児者の構文能力．音声言語医学，43，196-199.

斉藤佐和子（2002b）健常幼児の格助詞と態の表出―構文検査（斉藤私案）を使用して―．音声言語医学，43，173-181.

斉藤佐和子（2002c）健常幼児の談話における構文能力と説明能力―状況絵を用いて―．音声言語医学，43，308-315.

斉藤佐和子（2003）ダウン症児者の構文表出能力: 構文検査（斉藤私案）と状況絵を用いて．コミュニケーション障害学，20，8-15.

斉藤佐和子（2007）Down症候群の言語・コミュニケーション能力．笹沼澄子（編）発達期言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論．医学書院，165-179.

島守幸代・伊藤友彦（2011）知的障害児・者の吃音研究―最近の吃音研究の動向からみた今後の課題―．東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ，62，23-31.

Stathopoulou, N., & Clahsen, H. (2010) The perfective past tense in Greek adolescents with Down syndrome. *Clinical Linguistics & Phonetics*, 24, 870-882.

Stojanovik, V., Perkins, M., & Howard, S. (2004) Williams syndrome and specific language impairment do not support claims for developmental double dissociations and innate modularity. *Journal of Neurolinguistics*, 17, 403-424.

高木潤野・伊藤友彦（2007a）多語期のダウン症児における発話の非流暢性．特殊教育学研究，45，117-125.

高木潤野・伊藤友彦（2007b）ダウン症児における発話の非流暢性―非ダウン症知的障害児との比較―．学校教育学研究論集，16，45-54.

田中裕美子（2003）特異的言語発達障害の言語学的分析―研究者の立場から―．音声言語医学，44，216-221.

寺村秀夫（1982）日本語のシンタクスと意味Ⅰ．くろしお出版．

Thomas, M. S. C., Grant, J., Barham, Z., Gsödl, M., Laing, E., Lakusta, L., Tyler, L. K., Grice, S., Paterson, S., & Karmiloff-Smith, A. (2001) Past tense formation in Williams syndrome. *Language and Cognitive Processes*, 16, 143-176.

Vicari, S., Caselli, M. C., Gagliardi, C., Tonucci, F., & Volterra, V. (2002) Language acquisition in special populations: A comparison between Down and Williams syndromes. *Neuropsychologia*, 40, 2461-2470.

綿巻　徹（1999）ダウン症児の言語発達における共通性と個人差．風間書房．

Wexler, K. (1994) Optional infinitives, head movement and the economy of derivations. In D. Lightfoot & N. Hornstein (Eds.), *Verb movement*. Cambridge University Press, Cambridge, 305-350.

Wexler, K. (2003) Lenneberg's dream: Learning, normal language development, and specific language impairment. In Y. Levy & J. Schaeffer (Eds.), *Language competence across populations: Toward a definition of specific language impairment*. Lawrence Erlbaum, Mahwah, NJ, 11-61.

知的障害児者の形態的・統語的側面に視点を当てた言語研究の現状と課題

―― 特異的言語発達障害児の知見との比較を中心に ――

Contemporary Issues in the Morphological and Syntactic Aspects of Language in Individuals with Intellectual Disabilities:

A Comparison with the Findings of Specific Language Impairment

村　尾　愛　美*

MURAO Aimi

支援方法学分野

Abstract

This paper reviews studies of the morphological and syntactic aspects of language in individuals with intellectual disabilities, compares them to the findings of specific language impairment (SLI), and discusses related issues. First, previous studies on the morphological and syntactic profiles of children and adults with Down syndrome are reviewed. Second, children and adults with Williams syndrome are presented. Few studies have been conducted on the morphological and syntactic aspects of language in these syndromes in a Japanese context. Third, current research on Japanese-speaking children with SLI is introduced. Finally, we indicate several issues regarding the language of Japanese-speaking children and adults with intellectual disabilities that require further research, including: 1) comparison with other developmental disorders such as SLI, 2) the investigation of case-marking and voice based on linguistic theories, and 3) the use of both spontaneous speech samples and elicited production tasks.

Keywords: intellectual disability, morphology, syntax, specific language impairment

Department of Support Methods for Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿は，知的障害児者の形態的・統語的側面に視点を当てた言語研究を，特異的言語発達障害（SLI）の知見との比較を中心に概観し，今後の課題について論じたものである。はじめに，ダウン症児者の形態的・統語的特徴について検討した従来の研究を概観する。次に，ウィリアムズ症児者の形態的・統語的特徴について検討した従来の研究を提示する。わが国では，これらの障害児者における形態的・統語的特徴に関する検討はほとんどないことを示す。次に，日本語を母語とするSLI児の最近の知見を紹介する。最後に，知的障害児者の言語研究における今後の課題として，1）SLIなどの他の発達障害との比較，2）言語学の知見を踏まえた格助詞と態の検討，3）自然発話の分析と実験的検討の併用の必要性を述べる。

キーワード: 知的障害，形態，統語，特異的言語発達障害

* Tokyo Gakugei University（4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan）